〈研究ノート〉

「母親」の孤立を社会文化的価値観の文脈で理解する

大橋良枝*・揖斐衣海**

抄　録

本論は，揖斐ら（2022）の孤立感を抱えた母親たちの事例研究に基づき，母親たちの孤立と，孤立を助長する対人関係力動を内包する「叫び」について，母親たちの孤立要因を社会文化的価値観から検討することを目的とした。母性信仰の日本的特徴を理解するために，社会学研究と日本の神話研究を概観し，強烈に社会に影響している，強く自己犠牲的な母親像を詳細に描き，母親と子どもの叫びを母親の養育力の欠如の結果と切り捨ててしまう非メンタライジングな社会環境への適応手段として母親たちが孤立していることを考察した。そして，今後も母親が抱えている葛藤を社会の複層性の文脈で整理していくことが必要だと結論付けられた。

キーワード：孤立，母親，母性信仰，認識的不信，叫び

問題

厚生労働省による「健やか親子 21」の提言以降，児童虐待のリスクファクターの一つに養育者の孤立の問題が位置づけられ，それ以前より政策的に提起されてきた「子育ての社会化」の必要性が，三歳児神話の否定とともに一定の説得力を持つものとして広まっていった。

揖斐ら（2022）は，孤立感を抱えた母親たちの支援事例に基づいて，母親たちの孤立の問題を，メンタライジング理論における「認識的信頼（epistemic trust; Fonagy & Allison, 2014; Fonagy & Luyten, 2016; Fonagy, Luyten, & Allison, 2015）」，あるいは，それが失われた状態である「認識的不信（epistemic mistrust; Fonagy et al, 2019）」と関連付けて説明している。認識的信頼とは，個人に関わりがあり，一般化できる重要な社会・対人的情報を受け入れることへの開放性を示す概念である。個人のそれの発達は，社会・文化的文脈における個人の学習や社会的環境から利益を得ることを可能とする。これは端的に言えば，社会に対する安心感獲得と適応の動機を持つがゆえに，社会との情報と情緒交流が可能になり，その交流によりますます社会文化的適応が高まっていくプ

*心理福祉学部・心理福祉学科
**有限会社 KIPP

論文受理日 2022 年 11 月 21 日

ロセスと言える。しかし，客観的に見れば信頼が保証されるような場面であっても認識的信頼を経験できないという，認識的信頼の欠如状態，すなわち認識的不信（epistemic mistrust）の生じる場合がある。これは，トラウマに相当するような逆境体験や，何らかの理由で認識的信頼が欠如した状態が長期化し，自己感の歪み（パーソナル・ナラティブの歪み）が起きた経験などに起因する。認識的信頼が欠如すると，文化的知識を効率よく獲得するための重要なプロセスが制限されるため，社会状況への適応が困難になる（Fonagy, et al., 2019）。

つまり揖斐らは，孤立状態を，過去の傷つき体験などのために関わりのある社会や人との情報と情緒のやり取りの断絶が起きている状態とし，その情報と情緒の遮断ゆえに適応がますます困難になる状態として描いた。こうした認識的不信の記述は，大橋（2019, pp168−169）の描いた，孤立していたためにかえって困難な子育てに身を置くことになり，また支援からも遠のいてしまう悪循環のサイクルに陥る母親像と重なる。

一方で，認識的不信が非メンタライジングな社会に「適応」するために形成される場合があるとの Campbell ら（2022）の指摘は大変興味深い。彼女らは，発達初期の子どもと養育者二者の相互作用の背景にある社会的文脈を考慮する重要性について示し，子どものメンタライジング能力を育んでいくための養育者のメンタライジング能力や省察機能が維持されるためには，環境や社会的文脈の果たす役割が大きいことを示すと同時に，置かれている社会的文脈によっては，認識的不信を形成・維持させるのが適応的である場合もあることを指摘しているのである。この指摘からすると，何らかの理由で社会の中で孤立した養育者への支援を考えるにあたって，その孤立した養育者がどのような社会的価値観や文化に適応しようとしたのか考えることは，非常に重要なことであるように思われる。つまり，子どもを守るために，あるいは，自分を守るために，非メンタライジングな社会の在り方に適応していかなければならなかった可能性はないのか，という視点である。

もう一点，揖斐らの事例に基づく考察の中で目を向けたい概念がある。母親の孤立の文脈で上記の社会的価値観との関連を考えるにあたり，揖斐らの「叫び」（p.149）の概念は考察を深めてくれるように思われる。

この「叫び」について説明するために，この用語が出てきた文脈についてここに簡単に記したい。彼女たちの実施した，孤立感を抱えた母親たちの集団精神療法プロセスの冒頭，事例の母親たちは口々に「支援者」と呼ばれる立場にある人たち－医師，教師，カウンセラーたち－への不信や，家族から尊重されないことへの不満を語っていた。その中で，あるメンバーが子育てにおける「はらわたの煮えくり返る」体験を抽象的に語った。それについて男性リーダーが，不知の姿勢（not knowing stance; メンタライジング臨床技法）を意識して，分からないから聞きたい，と状況を具体的に尋ねた。そこで語られた体験は，確かに，聞く者に「それは手がかかっただろう」と心底思わせるような内容だった。聞いた男性リーダーは「気持ちが揺れに揺れて，その繰り返しの錯乱した状態が目に浮かぶようで…（中略）…相当苦しいだろうことは伝わってきました」と応じた。こ

の後，他のメンバーたちもそうした困難体験を具体的に語っていった。グループは相当に苦しい気持ちを抱えることになったと思われるが，1セッション目の最後にこれらをコンテイン（Bion, 1959）し続けたリーダーが，「このグループには叫びがある」「自分だけでなく子どもの叫びも交じりながら，誰も分かってくれない，というような騒音がずっと伝わってくる」と言語化した。また，叫びは騒音として聞こえてしまうため，そこに込められた助けの求めは他者から受け取られない。こうして本心が受け取られないことが本当に辛いことなのではないかと，共感的承認（empathic validation; メンタライジング臨床技法）がなされた。

上記のプロセスの中で，彼女らは，孤立している母親たちが発する声を「叫び」として記述している。この「叫び」は本文中で概念化が十分なされているとは言えないが，揖斐らの記述を見ると，「叫び」とは以下のように説明される現象である。

> 1セッション目の終わりには，男性リーダーが「このグループには《叫び》がある」と伝え，その叫びには自分だけではなく，子どもの叫びも混じりながら誰も分かってくれない，「そういう騒音がずっと伝わってくる感じがある」と言語化した。そして，叫びは騒音でもあって，本当に求めていることを伝え，受け取り損ねることもあるから，ここで理解していけたらいいことを共感的に伝えた。女性リーダーも，夫や支援者に労いや助けを求めて話すと「叫び」や「騒音」として聞こえてしまい，時には夫にさえも「嫌だったらやめれば？」と嫌味さえ言われてしまう。子どもを受け止めたいと思っているにもかかわらず，本心が伝わらないことこそが辛いことではないか，とこれまでの文脈を踏まえて彼女達に共通した心的状態を共感的に承認した。（p.149；強調と下線は筆者による）

この指摘を見ると，「叫び」こそが，母親を中心とする養育者支援の難しさの中核にある力動なのではないかと筆者は感じる。つまり「叫び」とは，①自分だけでなく様々な声が混ざり合った圧縮した訴えであり，②本当には理解してもらったり，労いや助けが得られたりすることを求めているのに，③周囲には騒音のように忌み嫌われる，といった，コミュニケーションの失敗がそこにはある。それは，本心では助けを求めているはずなのに，周囲には，怒りや不機嫌，パニックなどに映り，周囲の者を怖がらせたり，遠のかせたりしてしまい，結果的に叫んでいる者が，自分の本心が伝わらない痛みを抱え，ますます孤独になってしまうという，ネガティブなサイクルを内包したコミュニケーションの失敗なのである。

このコミュニケーションの失敗は，大橋（2017; 2019）が教師支援の文脈でBion（1962b/1999）のコミュニケーションモデルとしての投影性同一化理論を用いて説明してきたものがその力動をよく説明するものと思われる。助けを求めているはずの声が，結果的に周囲の者からの排除を導き，それゆえに助けを明確に求めることがますます難しくなるという力動である。

大橋が援用した，Bion の投影性同一化は，乳児と母親の相互作用をモデルとして組み立てられたものである。それによれば，乳児は感覚印象を解読する手段（α機能）がないために，投影性同一化を通してその感覚印象を母親の中に排出する。この時，乳児は自分の中から取り除きたい「死の恐怖」を母親の中に引き起こす。そして母親は「夢想」の能力によって乳児の感覚印象を解読し，乳児の恐怖感情を再取り入れしやすいように処理し，乳児に戻してやるものとされる。つまり，β要素は「保持することに不快感を伴う，思考以前の感覚印象」，α要素は「β要素がα機能によって処理され理解可能になったもの」である。また植木田（2016, p.99）は，学校で教職員らの理解を超えた言動を振りまき，周囲を脅かすような児童の発するコミュニケーションに対応するにあたって，そうした児童は迫害的な感情を刺激するもの（β要素）を排出していると捉えた。そして，そのβ要素を，組織とそこに含まれる一人一人の心的な成長に寄与する素材へと変換するα機能を備えた存在が不可欠だということを指摘した。この指摘を踏まえると，特にβ要素については，臨床理論としての有用性を鑑みて，「その受け手が迫害的な感情や，強い不快感を刺激されるという特徴によって認識されるもの」という点を，面接室を越えた日常の場に投影性同一化理論を援用する際の定義として加えることは，意味のあることと思われる。

さて，こうした投影性同一化理論に基づき，大橋は迫害的感情を刺激するような児童生徒による暴力行為や逃走行為への対応からメンタルヘルス上の問題を呈した知的障害特別支援学校教員たちへの支援モデルを検討する中で，EMADIS（Educational Model for Attachment Disorders in Special-Needs School; 大橋 , 2017）を構築した。このモデルは問題状況の中心力動を児童生徒とターゲット教員ペアの孤立と過度な密着にあるとみなし，児童生徒−教員間の投影性同一化力動（Bion, 1957; 1959）とα機能の概念で説明し，病理的対象関係から発達促進的関係への転換を描いたものである（図 1）。この図 1 に示された EMADIS 初期モデルは，後に Ohashi（2021）の検討を経て，投影性同一化を受け取った個人が不快感をため込んだ際に，周囲の仲間集団にそれを排出し，解毒してもらうことだけでなく，解毒されないまでも，仲間集団の中にその不快感がコンテインされることそのものが重要なのだと修正された。つまり，解毒よりも夢想そのものの意味が強調されるようになったのである。

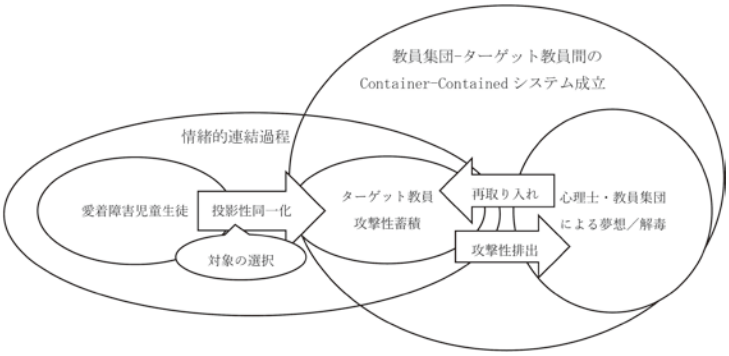

図 1：初期 EMADIS（大橋，2017）

上記の投影性同一化理論と大橋のモデルから，「叫び」とはα化されていない言葉以前の体験の暴発，恐らくβ要素であると推測する。それは，先に示した，①自分だけでなく様々な声が混ざり合った圧縮した訴えであり，②本当には理解してもらったり，労いや助けが得られたりすることを求めているのに，③周囲には騒音のように忌み嫌われる，といった，コミュニケーションの失敗であるという叫びの特徴と，β要素の解毒失敗状態との重なり合いから推測するものである。β要素とはもともとのBionによる積極的定義（1962b/1999, pp.18-19）では「現象とは感じられない，物自体」つまり，「あたかも言葉や観念を物自体と感じられるものの操作で置き換えるかのように，排出されたり，そのような操作に依存した思考作用の一種のために用いられたりできる対象」であり，それゆえに，物自体のように「刺激増大を心から除去するために」「排出」が起きるのだとされ，消化されないで排出されるものとしての意味合いが強調されている。筆者が本論で強調したいと考えている「叫び」の様相もまた，それによって暴発された非言語的コミュニケーション内容そのものが圧縮されており，複層的な要素が絡まり合う毛糸玉のような印象を受ける。故に，この「叫び」というコミュニケーションが運ぶものは，消化されずに排出される物自体であって，α化を求めているものと言う意味においてβ要素と考えてみたい。そこで本論では，さらなる議論の余地があるものとの留保を加えながらも，「叫び」を投影性同一化と考え，そのコミュニケーションによって運ばれ，投影されるものをβ要素と考えたい。

こうして見ると，母親たちの「叫び」は圧縮され，解毒を経ていない，様々な要素を含みこんだ混乱したメッセージのようである。大原（2003）が示すように，虐待行動のリスクファクターも多層性的であることがわかっているが，その多層性にもかかわらず援助場面で，叫んでいる者だけが責任を負わされることこそが臨床上留意すべき点だと筆者は考える。これは，大日向（2006）の，日本社会の中で養育上の問題が起きた場合，母親たちが加害者として糾弾されやすく，常識化された母性信仰の逸脱者であるがゆえに社会からの被害者となりやすいという社会的な構図があるという指摘にも示されている事実である。しかし，この母親と受け取り手である家族や支援者間のコミュニケーションの失敗には，Campbellらが指摘したように，社会文化的文脈が寄与していないだろうか。これは，EMADISの修正において，Ohashi（2021）が「集団の夢想」すなわち，集団の中に夢想する風土のあることの重要性を指摘したこととも重なるものである。

そこで，本研究ノートでは，認識的不信状態にある母親たちがあげている叫びについて，とりわけ彼女たちを取り囲む環境に焦点を当て，心理学的に考察を深めた上で，彼らが認識的不信状態に陥らざるを得なかった社会文化的要因について検討を進めることを試みる。

理論検討

日本社会における母性信仰

大日向（2016）は，日本社会の母性信仰の根強さについて説明している。母性信仰とは，母親が自己犠牲的に子どもに献身することであり，それを女性の本能であるとする社会的価値観を示す概念である。一方，こうした価値観がどの程度日本特有なのかについては議論の余地があるように思われる。この春刊行され，ベストセラーになった「母親になって後悔している」（ドナート，2017/2022）には，イスラエルにおける母親であることこそ女性の幸せであるという通念の強さや，それに締め付けられる女性の苦しみが描かれており，国境を越えて日本の女性たちの共感を得たようであった。こうした異文化間での母性信仰に対する共鳴が起きたことからすると，母性信仰に関して，その日本の独自性はどの程度かという点については検討の余地があると言えるだろう。そこで本論では社会学的な知見と，神話の検討による知見から，日本の母性信仰，「母親」表象の質について考えてみたい。

社会学研究にみる「母親」

本田（2008）は，戦後日本の育児・家族政策は，労働力の中心である男性を「支える」存在として女性が無償で家事・育児を行うことを前提に展開されてきたため，子どもと過ごす時間が長い母親の育児態度が「家庭の教育力」として語られる傾向があると指摘する。さらに日本では，家庭内の問題は家庭内で解決すべきと考える傾向が強く，子育ては「家族の教育力」を表すものと認識されている（耳塚，2007; 望月，2011）。

また，中西ら（2020）の国際比較調査の結果によると，より「家族思い（family-friendly）」な国ほど，就学前の子どもの育児の主体は家族以外でも良いと考えていることが示され，さらに，「就学前の子どもの世話は主に親が担うべき」という認識についても，個人属性の違いよりも国の文脈効果の違いが大きいことを示し，国の政策によって労働参加率の男女差が是正されれば子育ての役割に関する家族規範が修正される可能性を示唆している。一方，小林（2020）は，国の政策により日本女性の就業率は上昇していると言われるが，他の先進国では見られない M 字型の就業曲線が日本では観察されることが示されている。彼女によれば，日本の女性の就業率が M 字型カーブを描く理由は，出産を機に労働市場から離れ，子どもが小学校高学年になると仕事に復帰する傾向があるためであり，また，出産を機にキャリアを諦め，復職時にパートタイムなどの雇用を求める女性が多いのも日本の特徴であるとのことだ。この現象は女性の就業率を上げるという政策と，女性が子育てをするべきという日本的価値観の妥協点を反映しているのではないかと小林は考察している。

これらの議論を並べてみると，とりわけ，母親が養育の中心を担い，そのシステムに置いて子育てに成功している家庭は「家族の教育力」が高いものとして評価される価値観が一定程度維持されているものと考えられる。そして，そこには政治政策の背景にも根強く残る，あるいは政策が変わっても持続する，母性をめぐる社会的無意識の影響力があるように感じられる。その影響力が，母性信仰と言われるものなのではないだろうか。このような根深い信仰の背景にある私たちの歴史的価値観を検討するために，日本神話にみる「母親」についての考察に触れてみたい。

日本神話にみる「母親」

ユング派の心理学者横山（1995）によれば，西欧のそれに比して日本の集合的意識は，ことさら排除的に「母親元型」の肯定的側面のみに光を与えてきたと言う（p.97）。多くの世界の神話の中に，「いつまでの可愛い幼児でいて欲しい」という母親の強い無意識的願望である「太母の否定的側面，すなわち飲み込む母親」「自分自身と違った子どもの新しい意識を育て上げることができず，無意識的に子どもを自分の生のために利用してしまう母親」モチーフが存在する（pp.52–53）。そして，もちろん日本もまたその例外ではないのだが，とりわけ日本の女神の場合，（男性神の未熟性や裏切りによって）自らの「否定的側面」や，時に醜悪である原初的側面が露呈すると，自らの意志で自らを消し去る特徴があると言う。イザナギとイザナミの神話では，黄泉の国に幽閉されたイザナミは生殖性と直接的に結びついた「肯定的な母性」の中でのみ生きることを許されており，イザナミも，また閉じ込めたイザナギも，太母の否定的側面を受容できなかった（pp60–61）。西欧の神話では，対照的に，母イシュタルに毎年殺されながら蘇生させられるタンムズのように，自分の息子であり愛人でもある男性神を自由気ままに扱う女神たちの姿がたびたび描かれており，否定的な母性の描かれる余地が相当に存在する（p.68）。

また，コノハナサクヤ姫に至っては，天からこの世に降りてきた最初の天皇家の祖先であるニニギと一夜の結婚を営み，受胎するが，それが自分の子どもかニニギに疑われ，姫は自分の産む子がニニギの子であることを証明するために産室に火を放つ（pp.76）のであるが，このように，神話には姫の圧倒的強さ〈意志・自我〉が示されている。この際，姫に様々な感情があり，それが火によって象徴されているのだろうけれども，姫は強い情動に圧倒されることなく，3 人の子どもによって示される新しい可能性を成功裏に産み出し，そして自らは消失したのである（p.76）。

こういった神話の分析を踏まえ，横山は以下のように考察する（p.93）。

> このように，日本の女神たちの〈意識〉の在り方とノイマンの「母権的意識」とは，ある程度類似性があるが，この母権的意識には属さない〈自我・意識〉に由来する強い意志の力を，日本の女神たちは保持している。それは，これらの日本の女神たちは，新しい〈意識〉を担う自分の子どもたちの価値をどこかで理解していたからこそ，この強い意志力で子どもから

離れることを選び，飲み込もうとする自らの「否定的側面」を犠牲にしているからである。

つまり，日本の母性に関わる集合的無意識の中に，母とは，自らの太古的な飲み込もうとする欲望を次の世代を産み出すために隠し，そのためには自らを消し去ろうとすることも厭わない強い自我の持ち主であるという，男性性女性性を備えた像があり，それが日本社会における母性信仰の「強く自己犠牲的な母親」像に反映されているのではないかと推察されるのである。

社会的価値を内在化し自らを責めることと，孤立

恐らく，こうした社会的価値観に取り囲まれていたとしても，個人としてそのことに無関心で居られれば，葛藤する必要はないが，私たちは，社会的な価値規範から影響を受けずに生きていくことはできない。先述の，大日向（2006）の，日本社会の中で養育上の問題が起きた場合，母親たちが加害者として糾弾されやすく，常識化された母性信仰の逸脱者であるがゆえに社会からの被害者となりやすいという社会的な構図は，日本の母性信仰と強い関連があるとする一連の研究は，強い説得力を持って国内で受け入れられているが，筆者がここで強調したいのは，その「糾弾」の声は，外から向けられるものだけでなく，自分で自分に向けてしまうほど，内在化されてしまうという点である。大橋（2019）はこれまでに，孤立を感じ，援助を求められない教師や福祉士の心理的要因を，その集団における価値規範といった外的要因（あるいは，それが内在化されている場合は内的要因）と，その価値規範のように行動し続けることが難しいために生じる罪悪感の両側面から論じてきたが，こうした心情は，揖斐ら（2022）の事例でも散見された。彼女らの事例に著された軽度発達障害児の母親たちは，子育ての難しい子どもたちを抱えているにもかかわらず，ほぼ一人で子育てに奮闘していた。しかし，学校や母親仲間の間はおろか，家族の中でも彼女たちは，すぐにイライラする「ダメな母親」と批難されたり，自分でも自分のことを母親としての力が足りない「ダメな母親」だと感じ，ひたすらに怒り，孤立感を抱えていた。つまり，実際に外からの糾弾の声を受けつつ，自分でも理想の母親としてふるまえない自分に何らかの欠陥を感じ，自分を責め，時に，支援を受けるに値しない者と自分を捉えていたのである。そしてその内外からの自分を糾弾する声は，自分の苦しみを誰も聞いてくれない，自分に心を寄せてくれる人はいないという，認識的不信を導き，彼女たちを支援から遠ざけ，事態をどんどん難しくしていたようだった。

この点にはさらなる検討が必要であるとは思われるが，とりわけ日本における，母親は本能的に自己犠牲的に子どもに献身する存在であり，同時に賢く自分の太古的側面を抑圧できるほどに自我的でもあり，必要に応じて消え去ることも厭わない存在であるとする母性信仰を無意識的に取り入れ，盲目的に母親と子どもの叫びを「母親の養育力の欠如」の結果と切り捨ててしまう非メンタライジングな社会環境に適応するために，母親たちは自分を責めることで，他者の責任を明確に問うでもなく，諦め，自分を消え去らせているのではないかと考えるが，どうだろうか。

結論

揖斐らの事例では，母親たちの叫びに，不知の姿勢で接近し，共感的承認に辿りつくまでよく話を聴き，そして叫んでいた母親たちも自分が何を求めているか理解していくプロセスが展開されていた。そしてそこには，夫自身が持つ家族の葛藤であったり，自分自身が自分の母親との間で抱えていた諦めなど，家族や個人の個別の痛みが隠れていたことが明らかになっていった。

本論の執筆意図として，実のところ，筆者らが助成を受けているマツダ財団研究助成において，申請当時, 筆者らはこの「叫び」を母親個人の青年期的な発達の未熟性と結びつけ, それを「怒り」と捉えて仮説としていたところへの反省があることをここに記したい。つまり筆者らもまた，彼女たちの個人の問題に帰属させ過ぎていたのである。もちろん，叫ぶ母親たちにアイデンティティ発達などの個人の問題が全くないとは言えない。けれども，研究プロジェクトを通して，叫んでいる母親たちの声を聴き続けることで，図２のような階層性と，複雑な情緒状態の圧縮を「叫び」に想定することが妥当なのだと気づいていったのである。本論ではとりわけ社会文化的価値における母性信仰を掘り下げて考えたのであるが，今後も彼女たちが抱えている葛藤を図２のような階層を想定して整理していきたいと思っている。

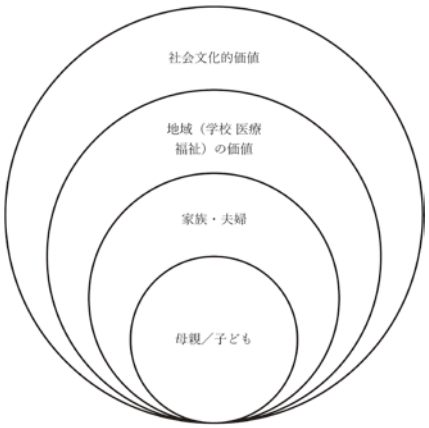

図２：母親と子どもを取り囲む価値の階層性

考察を通して，いわゆる「問題児」と見られるような子どもを抱えている母親もまた,「叫び」をあげている問題母と思われているような状況があった場合に，彼女をいわゆる「モンペ」と単純にラベリングするのではなく，彼女が置かれている社会やコミュニティの文脈，あるいは家族の文脈などに思いを馳せ，彼女の叫びが内包する複雑な構造を理解しようとすることへの眼差しが社会に浸透していけば，私たちの住む世界はもっとメンタライジングな世界になるのではないかと期待し，今後も検討を続けていきたいと思っている。

謝辞

本論は第 34 回マツダ研究助成―青少年健全育成関係―の研究結果を受けて執筆されたものである。

Reference

Bion, W. R. (1957). Differentiation of the psychotic from the non-psychotic personalities. *International Journal of Psychoanalysis*, 38, 266–275.

Bion, W. R. (1959). Attacks of linking. *International Journal of Psychoanalysis*, 40, 308–315.

Bion,W.R. (1962). *Learning from experience*. Tavistock. 福本修（訳）(1999).「経験から学ぶこと」. 精神分析の方法Ⅰ〈セブン・サーヴァンツ〉. 法政大学出版局.

Bion,W.R. (1970). *Attention and Interpretation*. Tavistock.

Campbell, C. & Allison, E. (2022). Mentalizing the modern world. *Psychoanalytic Psychotherapy*, https://doi.org/10.1080/02668734.2022.2089906.

Donath, O. (2016). *Regretting Motherhood. (Wenn Muetter bereuen.)* Albrecht Knaus Verlag. 鹿田昌美（訳）(2022).「母親になって後悔している」新潮社 .

Fonagy, P. (2021). Foreword. In T. Rossouw, M. Wiwe & I. Vrouva. (Eds.). Mentalization-based treatment for adolescents: A practical treatment guide. Routledge.

Fonagy, P. & Allison, E. (2014). The role of mentalizing and epistemic trust in the therapeutic relationship. Psychotherapy, 51(3), 372–380.

Fonagy, P. & Campbell, C. (2017). Mentalizing, attachment and epistemic trust: how psychotherapy can promote resilience. Psychiatria Hungarica, 32 (3), 283–287.

Fonagy, P. & Luyten, P. (2016). A multilevel perspective on the development of borderline personality disorder. In D. Cicchetti (Ed.). Developmental psychopathology. Vol. 3: Risk, disorder, and adaptation (3rd Ed.). (pp. 726–792). John Wiley & Sons.

Fonagy, P., Luyten, P., & Allison, E. (2015). Epistemic petrification and the restoration of epistemic trust: A new conceptualization of borderline personality disorder and its psychosocial treatment. Journal of Personality Disorders, 29(5), 575–609.

Fonagy, P., Luyten, P., Allison, E., & Campbell, C. (2019). Mentalizing, epistemic trust and the phenomenology of psychotherapy. Psychopathology, 52, 94–103.

本田由紀（2008).「家族教育」の隘路：子育てに強迫される母親たち．到草書房

揖斐衣海・西村馨・大橋良枝（2022). 第 12 章 母親のグループ：孤立と認識的信頼の途絶からの回復. 西村馨（編著）実践・子どもと親へのメンタライジング臨床：取り組みの第一歩．岩崎学術出版.

小林由希子（2020). 産後から切れ目ない新たな保育子育て支援システムの検討：現代日本の状況と北欧諸国および保育先進国の保育政策の国際比較から．札幌大学総合研究，12. 35–59.

耳塚寛明（2007). 小学校学力格差に挑む：だれが学力を獲得するのか．教育社会学研究，80. 23–39.

望月由起（2011). 現代日本の私立小学校受験：ペアレントクラシーに基づく教育選抜の現状．学術出版会.

中西啓喜・福田紗耶香・西野勇人（2020). 保育意識についての国際比較分析：ISSP2012 を用いたマルチレベルモデルによるアプローチ . 社会学研究科年報，27, 7–18.

大橋良枝（2017). 知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神分析的検討(1)：愛着障害児の投影性同一化と教員の孤立．聖学院大学論叢，30(1)，65–81.

大橋良枝（2019）．愛着障害児とのつきあい方 : 特別支援学校教員チームとの実践．金剛出版.
Ohashi, Y. (2021). Discussion on the Meaning of “Reverie of Groups” During School Consultation. Forum, 9. 66–74.
大原美知子（2003). 母親の虐待行動とリスクファクターの検討：首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から．社会福祉学，43(2). 46–57.
大日向雅美（2016）．母性の研究―その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証．日本評論社.
植木田潤（2016）．教室にいる発達障害のある子どもと教員を支援する．平井正三・上田順一（編）．学校臨床に役立つ精神分析．誠信書房，80–100.
横山博（1995）．神話のなかの女たち：日本社会と女性性．人文書院.

Understanding the isolation of mothers in the context of sociocultural value system.

Yoshie OHASHI・Emi IBI

Abstract

This study is based on the case study by Ibi et al (2022) of mothers experiencing isolation. It aims to examine mothers' isolation and the "cry" that encompasses the interpersonal dynamics that contribute to their isolation, and to examine the factors that contribute to their isolation in the context of the sociocultural value system. In order to understand the Japanese characteristics of motherhood beliefs, sociological studies and Japanese mythological studies were reviewed to detail the image of strong, self-sacrificing mothers with intense social influence. Furthermore, the study examines the isolation of mothers as a means of adapting to a non-mentalizing social environment that dismisses the cries of mothers and children as the result of a lack of maternal nurturing power. Isolation was discussed. It was concluded that it is necessary to continue to organize the conflicts faced by mothers in the context of social pluralism.

Key words: Isolation, Mothers, Motherhood myths, Epistemic mistrust, Cry